

Benesse® 教育研究開発センター

高校受験調査

高校受験の経験は、子どもたちにとって
どのような意味をもつのだろうか？

Benesse® 教育研究開発センターは、2011年9月に全国の高1生と母親に、
高校受験に関する振り返り調査を実施しました。



目次

調査概要・回答者の属性	2	5 受験の悩み（子ども）	12
I 志望校選び		6 受験の悩み（母親）	13
1 受験に関する時期	4	7 母親の関わり	14
2 重視したこと	5	III 受験の評価	
3 情報源	6	1 受験を振り返って	15
4 母親の関わり	7	2 よかったこと・反省点	16
II 受験勉強		IV 受験と高校生活	
1 勉強時間	8	1 現在の高校での取り組み・悩み	18
2 得意な教科・苦手な教科	9	専門家のコラム	20
3 勉強の理由と方法	10		
4 自分なりの工夫	11		

調査概要

◆調査テーマ

- 今の子どもたちにとって、高校受験の経験がどのような意味をもつのかを明らかにすること
- 志望校選び・受験勉強のあり方と、成長実感や現在の学習状況との関連を明らかにすること

◆調査方法

インターネット調査

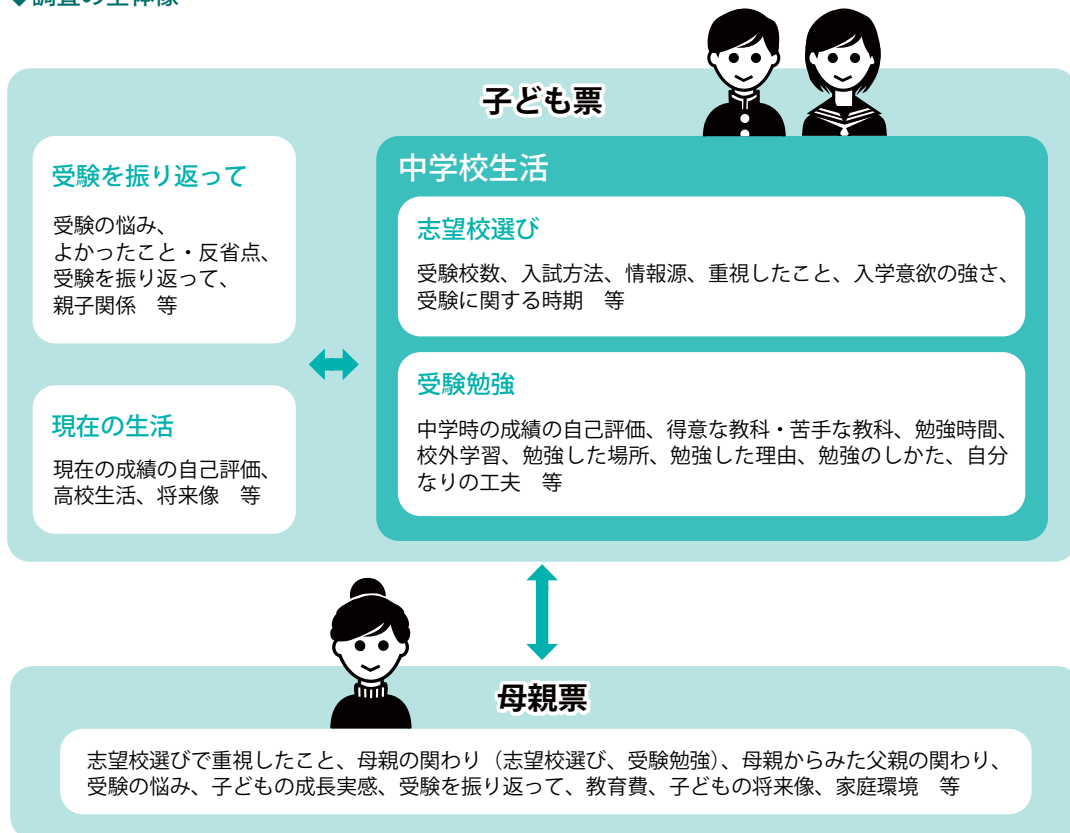
◆調査時期

2011年9月

◆調査対象

インターネット調査会社の約191万人のモニター母集団のうち、子どもをもつ母親（35歳～59歳）10万人に対して予備調査を実施。このうち、高校受験（中高一貫校の内部進学は除く）を経験した高1生の子どものいる母親にアンケートの協力を依頼。母子3,085組のサンプルが集まった時点で調査を終了。

◆調査の全体像



※本報告書で使用している百分比（％）は、有効回答数のうち、その設問に該当する回答者を母数として算出し、小数点第2位を四捨五入して表示した。四捨五入の結果、数値の和が100にならない場合がある。

回答者の属性

子ども

- 性別
 - 男子..... 48.9%
 - 女子..... 51.1%
- 校内成績（中学3年の冬休み前・自己評価）
 - 上位..... 19.9%
 - 中上位..... 40.2%
 - 中位..... 17.4%
 - 下位..... 21.9%
 - 覚えていない..... 0.7%

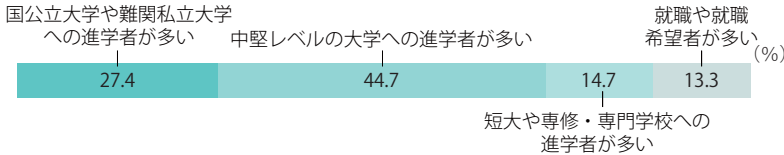
※本文中の「中3時の校内成績」別の分析では、この分類を用いている。「1（上のほう）」と回答した人を「上位」、「2」「3」と回答した人を「中上位」、「4（真ん中）」と回答した人を「中位」、「5」～「7（下のほう）」と回答した人を「下位」とした。
- 出身中学
 - 公立中学..... 97.2%
 - 国立中学..... 1.7%
 - 私立中学..... 1.2%

母親

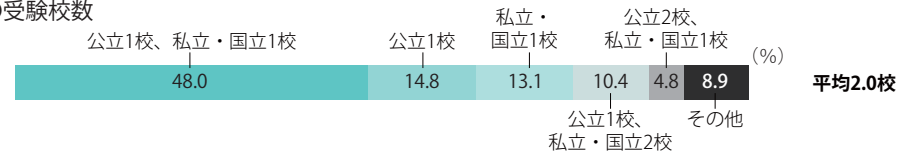
- 年齢
 - 35～39歳 10.6%
 - 40～44歳 42.2%
 - 45～49歳 38.1%
 - 50歳以上 9.1%
- 就業状況
 - 正規の社員・従業員..... 10.0%
 - 派遣・契約社員..... 4.4%
 - パート・アルバイト..... 41.0%
 - 自営業・自由業・家族従業員..... 5.8%
 - 無職（専業主婦など）..... 37.3%
 - その他、答えたくないなど..... 1.5%
- 最終学歴
 - 中学校、高等学校..... 37.8%
 - 専門学校・各種学校..... 16.2%
 - 短期大学..... 27.1%
 - 大学、大学院..... 18.3%
 - その他、答えたくないなど..... 0.6%

子ども

●現在通っている高校（卒業後の進路）

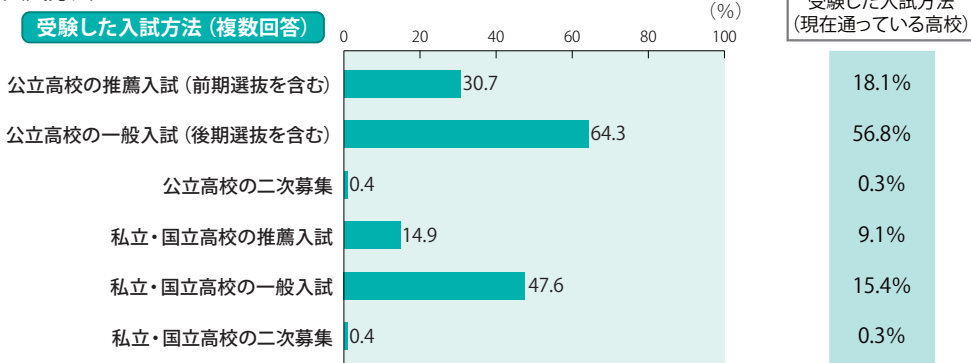


●受験校数



注) 同じ学校を複数回受験した場合は1校として回答してもらっている。

●入試方法



I 志望校選び

1 受験に関する時期

6割の子どもが中3の初め頃までに高校受験を意識し、中3の夏休み頃までに受験勉強を開始する。

Q 次のことを考えたり、決めたりしたのはいつですか。

子ども

表1-1 受験に関する時期

(%)

	高校受験を意識し始めた時期	高校受験にむけた勉強を始めた時期	今通っている高校が受験校の候補としてあがった時期	今通っている高校を受験することを決めた時期
入学前～中1の間	10.2	3.9	11.5	5.7
中2前半～夏休み後ぐらい	13.2	6.9	7.9	3.6
中2の後半	12.1	7.2	4.7	2.6
中3の初め頃	25.9 累積61.4%	21.0	15.4	11.3
中3の夏休み頃	16.3	25.0 累積64.0%	15.7	12.3
中3の夏休み後ぐらい	9.0	14.1	16.2 累積71.4%	16.1
中3の後半	7.1	12.3	18.1	30.3 累積81.9%
入試直前になって	1.6	3.9	7.1	15.7
とくに意識しなかった	4.4	5.7	3.5	2.4

注) 「入学前～中1の間」は「中学校に入学する前」+「中1の初め頃」+「中1の夏休み頃」+「中1の夏休み後ぐらい」+「中1の後半」の%。「中2前半～夏休み後ぐらい」は「中2の初め頃」+「中2の夏休み頃」+「中2の夏休み後ぐらい」の%。

「高校受験を意識し始めた」のは、「中2の後半」までで3割強、「中3の初め頃」までで6割を超える。「高校受験にむけた勉強を始めた」のは、「中2の後半」までで約2割、「中3の夏休み頃」までで6割に達するが、「中3の後半」から始めた子どもも1割強いる。「今通ってい

る高校が受験校の候補としてあがった」時期はばらつきが大きいですが、最終的に「今通っている高校を受験することを決めた」のは「中3の後半」がもっとも多い。

2 重視したこと

推薦入試で合格した子どものほうが、志望校選びの際に高校の具体的な活動やカリキュラムを重視していた。

Q 志望校を決めるのに、次のようなことをどれくらい重視しましたか。

子ども

図1-1 志望校選びで重視したこと



注1) 「とても重視した」+「まあ重視した」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があるもの、<<>>は10ポイント以上差があるもの。

注3) 入試方法別は現在通っている高校に合格した時の入試方法でわけている。現在の高校に「二次募集で合格した」ケースは少なかったため省略している。

「自分の学力にあっている」「通学に便利な場所にある」の2つがとくに高い。また、「学費があまりかからない」も6割が「重視した」と回答している。一方で、「部活」「施設や設備」「特色のある授業、カリキュラム」「スポーツや芸術活動」など、5割前後の項目が多く、重

視した点は子どもによって多様である。この点に関して、現在通っている高校に合格した時の入試方法別にみても、推薦入試で合格した子どものほうが、より多くの項目を重視していたことがわかる。

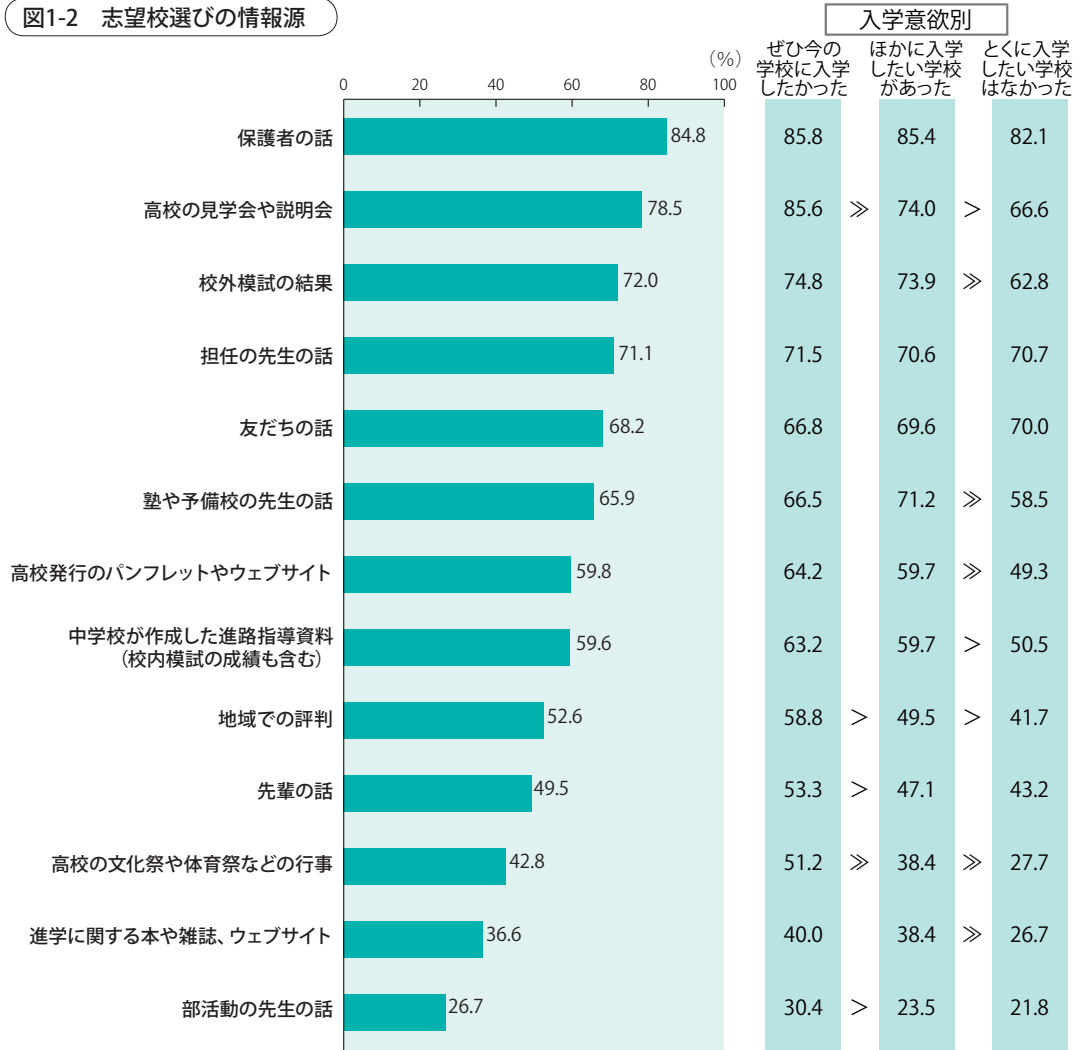
3 情報源

8割の子どもが、志望校選びで「保護者の話」「高校の見学会や説明会」を参考にした。

Q あなたは、志望校を決めるのに、次の項目のようなことをそれぞれのくらい参考にしましたか。

子ども

図1-2 志望校選びの情報源



注1) 「とても参考にした」 + 「まあ参考にした」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があるもの、<<>は10ポイント以上差があるもの。

注3) 「入学意欲」の詳細はp15図3-2を参照。

8割の子どもが「保護者の話」「高校の見学会や説明会」を参考にしている。また、「担任の先生の話」「友だちの話」「塾や予備校の先生の話」がいずれも7割程度で、人の話を参考にして志望校を決める子どもが多いことがわかる。入学意欲別でみると、「ぜひ今の学校に

入学したかった」群は、「高校の見学会や説明会」「高校の文化祭や体育祭などの行事」でとくに他の群より数値が高く、実際に高校に足を運びながら志望校選びをしていたようすがうかがえる。

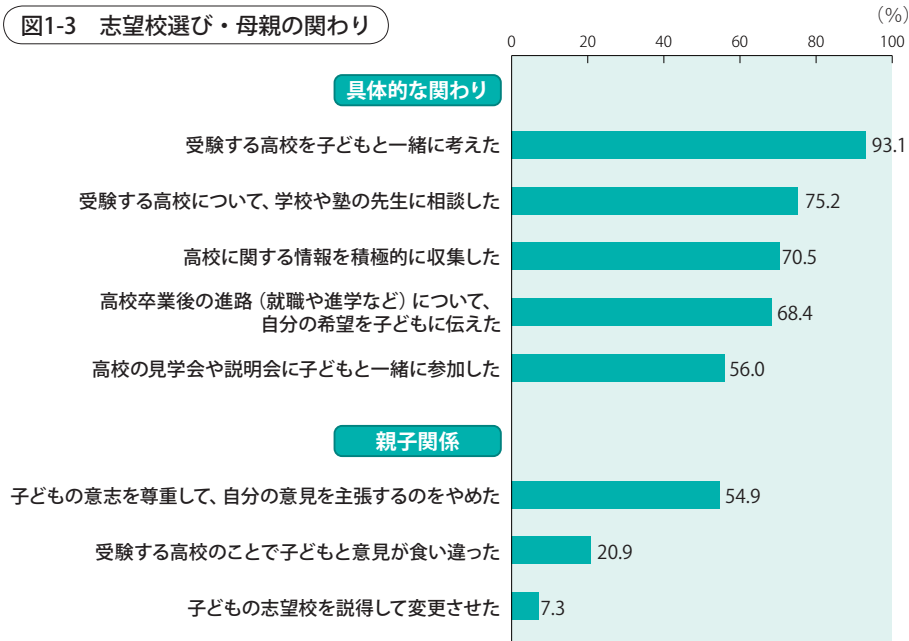
4 母親の関わり

志望校選びについて母親も積極的な情報収集をしているが、決定は子ども主体で行われている。

Q あなたは、お子様の志望校を決めた時のことについて、次のようなことがどれくらいあてはまりますか。

母親

図1-3 志望校選び・母親の関わり

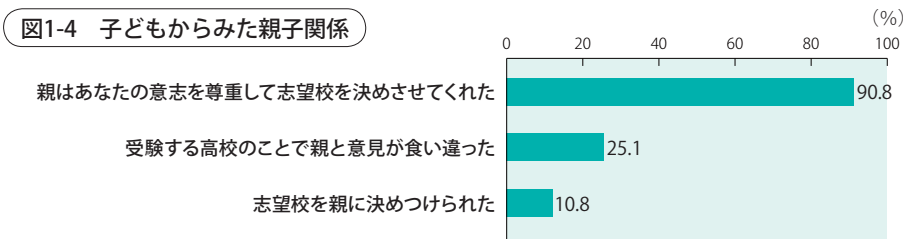


注) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

Q 志望校を決めた時、次のようなことがどれくらいあてはまりましたか。

子ども

図1-4 子どもからみた親子関係



注) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

6 ページで多くの子どもが情報源として保護者の話を参考に行っていることがわかった。実際に母親は、志望校選びについて「学校や塾の先生に相談」したり「高校の見学会や説明会」に参加したりと、積極的な情報収集を行っている。しかし、志望校決定の場面では「子

どもの意志を尊重して、自分の意見を主張するのをやめた」母親が 54.9% いる。子どもの回答では「親はあなたの意志を尊重して志望校を決めさせてくれた」が 9 割に達しており、志望校決定は子ども主体で行われる家庭が多いことがわかる。

Ⅱ 受験勉強

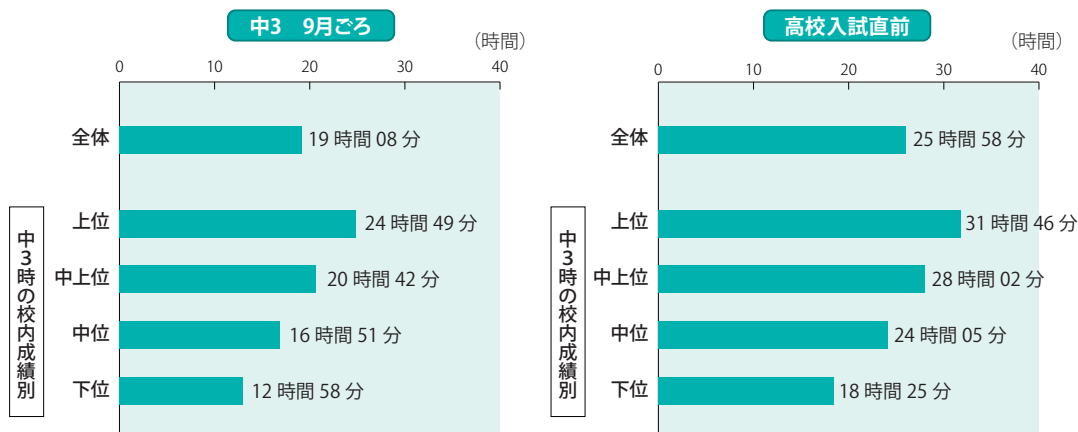
1 勉強時間

高校入試直前には学校外での勉強時間が長くなり、成績上位の子どもでは週あたり約32時間となる。

- Q** ・あなたは次の時期に、どれくらい勉強していましたか。学校や塾・予備校で授業を受けていた時間は除いて考えてください。
- ・中3の9月以降、あなたは学習塾や予備校に行っていましたか。
 - ・(「行っていた」人にお聞きします。) 1週間に何回くらい行っていましたか。
- 学習塾や予備校の授業は、1回にどれくらいの時間ありましたか。

子ども

図2-1 週あたりの勉強時間



- 注1) 週あたりの勉強時間は、学校や塾の授業を除いた勉強時間と、塾での授業時間を合計して、平均値を算出したものである。
- 注2) 学校や塾の授業を除いた勉強時間は、中3の9月ごろと高校入試直前の2時点で尋ねている。「ほとんどしない」を0分、「30分くらい」を30分のように置き換えたのちに、平日の勉強時間を5倍、休日の勉強時間を2倍し、これらを合計して1週間の時間を算出した。
- 注3) 塾での授業時間は、中3の9月以降の通塾状況(冬期講習を除く)をもとに算出している。通塾していない人を0分とし、通塾している人については週あたりの日数と1回あたりの時間を乗じて1週間の時間を算出した。

表2-1 週あたりの勉強時間「ほとんどしない」の比率

	全体	中3時の校内成績別			
		上位	中上位	中位	下位
中3 9月ごろ	6.0	2.9	2.9	5.4	< 14.4
高校入試直前	3.1	1.6	1.0	2.2	< 8.9

- 注1) 週あたりの勉強時間を算出し、0分だった人の%を示している。
- 注2) <>は5ポイント以上差があるもの。

子どもの学校外での勉強時間は、中3の9月ごろと比べると入試直前のほうが長い。中3時の校内成績別にみると、上位の子どもの勉強時間は、入試直前で週あたり平均約32時間となり、1日4~5時間に相当する。しかし、下位の子どもは週あたり平均で約18時間にと

どまり、入試直前でもほとんど勉強しない子どもが1割近くいる。ほとんどの子どもが受験にむけて学習量を増やしていく一方で、最後までモチベーションのあがらない子どももいることがわかる。

2 得意な教科・苦手な教科

得意な教科・苦手な教科ともに「数学」「英語」が多い。4割近い子どもが入試直前までに苦手教科の成績をあげている。

- Q**
- ・国語・社会・数学・理科・英語の5教科についてお聞きします。中学生のころ一番得意だった教科、苦手だった教科を1つずつ選んでください。
 - ・「一番苦手だった教科」についてお聞きします。あなたがその教科を苦手と感じるようになったのはいつごろからですか。
 - ・その教科を苦手と感じ始めた時期の成績、高校入試直前の成績はそれぞれ学年でどれくらいでしたか。
- 子ども**

図2-2 得意教科／苦手教科

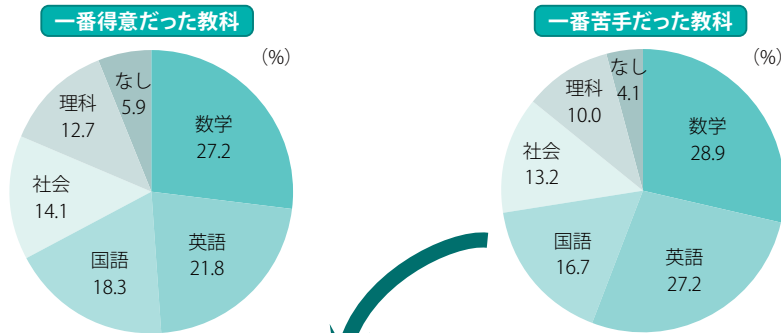
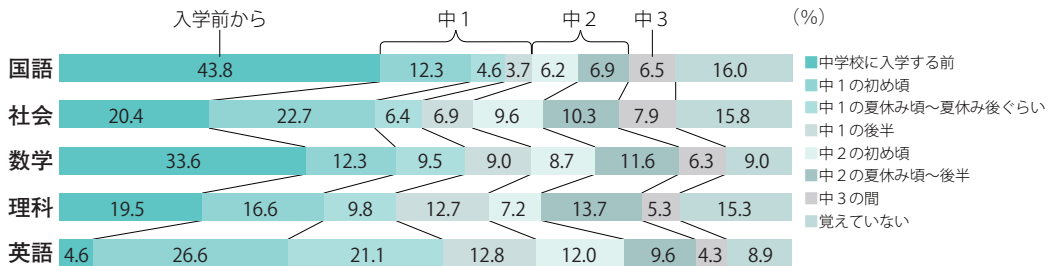


図2-3 苦手と感じ始めた時期



注1) 「一番苦手だった教科」の質問で、国語・社会・数学・理科・英語のいずれかを選択した人のみに尋ねている。
 注2) 「中2の夏休み頃～後半」は「中2の夏休み頃」+「中2の夏休み後ぐらい」+「中2の後半」の%。「中3の間」は「中3の初め頃」～「入試直前になって」までの%の合計。

図2-4 苦手教科の成績推移



注) 「一番苦手だった教科」について、「苦手と感じ始めた時期」と「高校入試直前」の2時点での校内成績をそれぞれ7段階で尋ね、その推移によって分類した。苦手教科がないケースや、成績を覚えていないケースは分析から除外している。

国語・社会・数学・理科・英語のなかで、一番得意だった教科、苦手だった教科を選んでもらったところ、どちらも「数学」「英語」の比率がとくに高い。苦手と感じ始めた時期をみると、「国語」「数学」は入学前から、「社会」「理科」「英語」は中1が多く、早い段階から

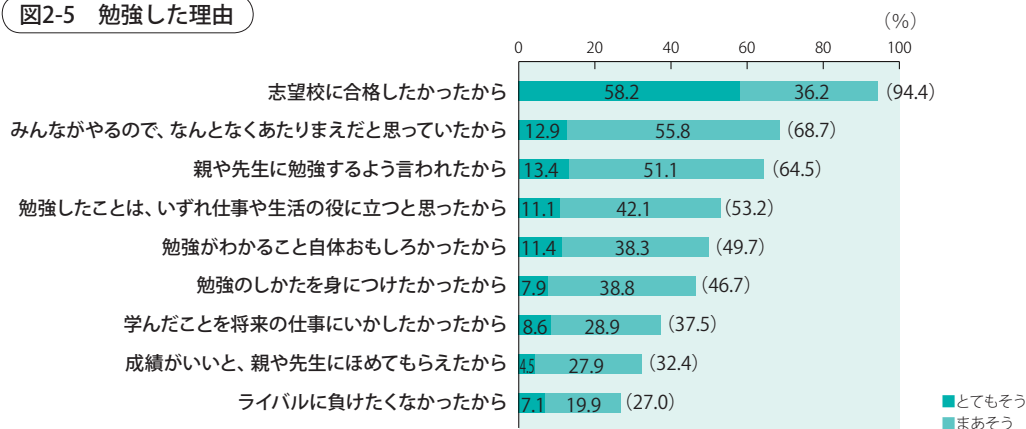
苦手意識が芽生えていることがわかる。しかし、苦手教科の成績推移をみると、高校入試直前までに「あがった」子どもが36.5%となっており、受験にむけて苦手教科の勉強にも取り組んできたようすがうかがえる。

3 勉強の理由と方法

勉強のおもしろさや役立ち感を理由に勉強していた子どもは5割。自分で勉強法を工夫したり計画を立てたりした子どもは4割。

Q 中3の9月以降を振り返って、あなたが勉強していたのは、どうしてですか。 **子ども**

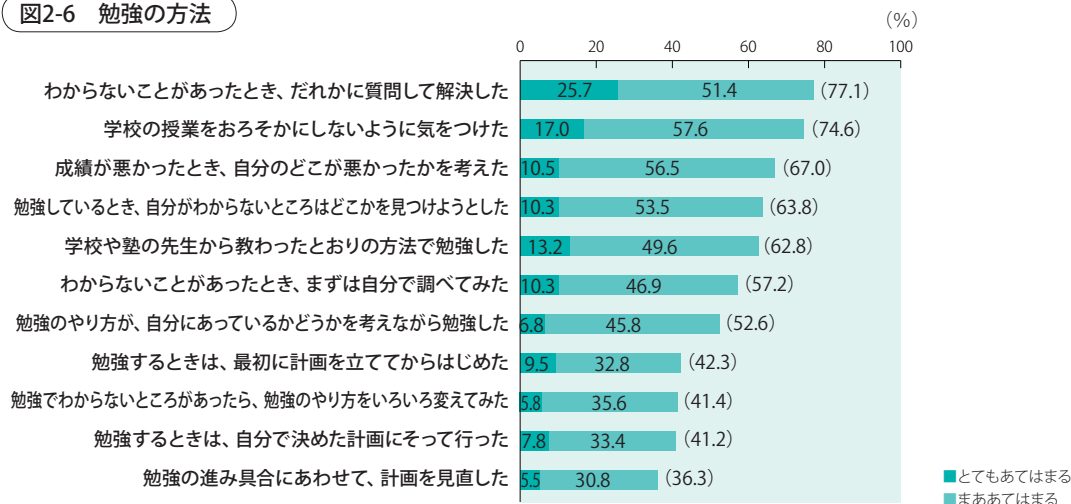
図2-5 勉強した理由



注) () 内の数値は「とてもそう」+「まあそう」の%。

Q 中3の9月以降を振り返って、勉強をするなかで、次のようなことはあてはまりますか。 **子ども**

図2-6 勉強の方法



注) () 内の数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

勉強の理由では「志望校に合格したかったから」が9割を越え、「みんながやるので」「親や先生に言われたから」が6~7割と続く。一方で勉強のおもしろさや役立ち感を理由に勉強していた子どもは、5割にとどまる。勉強の方法では「成績が悪かったとき、自分の

どこが悪かったかを考えた」子どもは7割近くいるが、実際に自分で勉強法を工夫したり、計画を立てたりした子どもは4割程度である。受験勉強のなかでも、勉強のおもしろさを感じて自分で工夫ができた子どもと、できなかった子どもがいることがわかる。

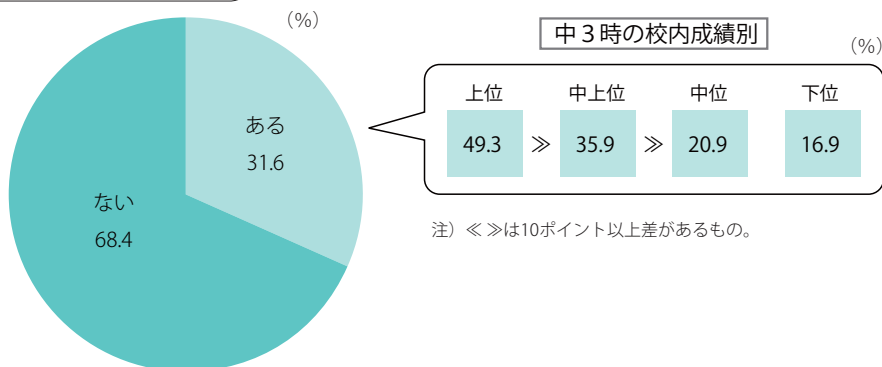
4 自分なりの工夫

3割の子どもが、受験勉強で自分なりの工夫やうまくのりきったコツがあったと回答。

Q ・受験勉強をするなかで、自分なりに工夫したことや、うまくのりきったコツはありますか。
 ・（「ある」とお答えになった方におかがいします。）あなたが自分なりに工夫したことや受験勉強をうまくのりきったコツを、具体的にお答えください。

子ども

図2-7 自分なりの工夫の有無



勉強のしかたの工夫

わからないところをそのままにしないことを徹底し、まず自分なりにじっくり考えたこと。（愛知県/公立/一般入試/男子）

得意教科は、先にこなし受験近くにもう一度確認するようにして、苦手教科をゆっくりやった。（岩手県/公立/一般入試/男子）

自分ひとりでやっても煮詰まるので、スカイプを使って友だちとわからないところを話し合いながら勉強した。（埼玉県/公立/一般入試/男子）

過去問の間違った所に印を付け、何度も解きました。印が消えていくのが嬉しかったです。（熊本県/公立/一般入試/女子）

中1は、毎日1時間勉強する。中2は、2時間勉強すると、家で、母に言われて決まっていたから、中3になったからといって、勉強時間を増やすこともあまりなく、勉強できた。毎日コツコツが、よかったと思う。（大阪府/公立/一般入試/女子）

普段のノートの取り方に気を配り、後から見返すだけで授業内容が思い出せるように一目でよくわかるレイアウトにした。また先生が言っていた「教科書には載っていないけど余談」的なこともできるだけ書き込み、ノートを見るとそのときのことが思い出せるようにした。（兵庫県/公立/一般入試/女子）

ここまで、と範囲を決めて勉強する。1週間分の勉強の予定を立て、1週間で帳尻が合うように勉強した。（鹿児島県/公立/一般入試/男子）

目標を掲げて、今がんばる

中学2年の冬に現在通っている高校の説明会に行ってから、絶対にこの高校に入学するのだという強い意志をもっていたので、落ち込みそうになったら、高校生活を思い描いてがんばった。（兵庫県/公立/推薦入試/女子）

「自分だったら合格できる、行ける」と思い込み、今がんばればすぐには結果として表れなかったとしても、きっといつか今のがんばりが大きな成果として表れると考えるようにした。（静岡県/公立/一般入試/女子）

息抜きや気分転換

愛犬と一緒にゆっくりした。愛犬をなでてやると安心した。（福岡県/公立/一般入試/男子）

勉強の合間にスポーツをして気分転換をした。（長崎県/公立/一般入試/男子）

生活リズム

弟妹が多く、家の中が騒がしいので、静かな時間に勉強できるように生活リズムを調整した。（夜7時に寝て朝3時に起きるなど）（神奈川県/公立/一般入試/女子）

朝は眠くて模試のときに居眠りしてしまったりしたので、毎朝5時半に起こしてもらって勉強した。そうすると8時頃には完全に目が覚めた。（東京都/私立/一般入試/男子）

ゲームや漫画をしまいこんで近くに置かなかったし、テレビをみるのもやめた。（香川県/公立/推薦入試/男子）

友だちの支え

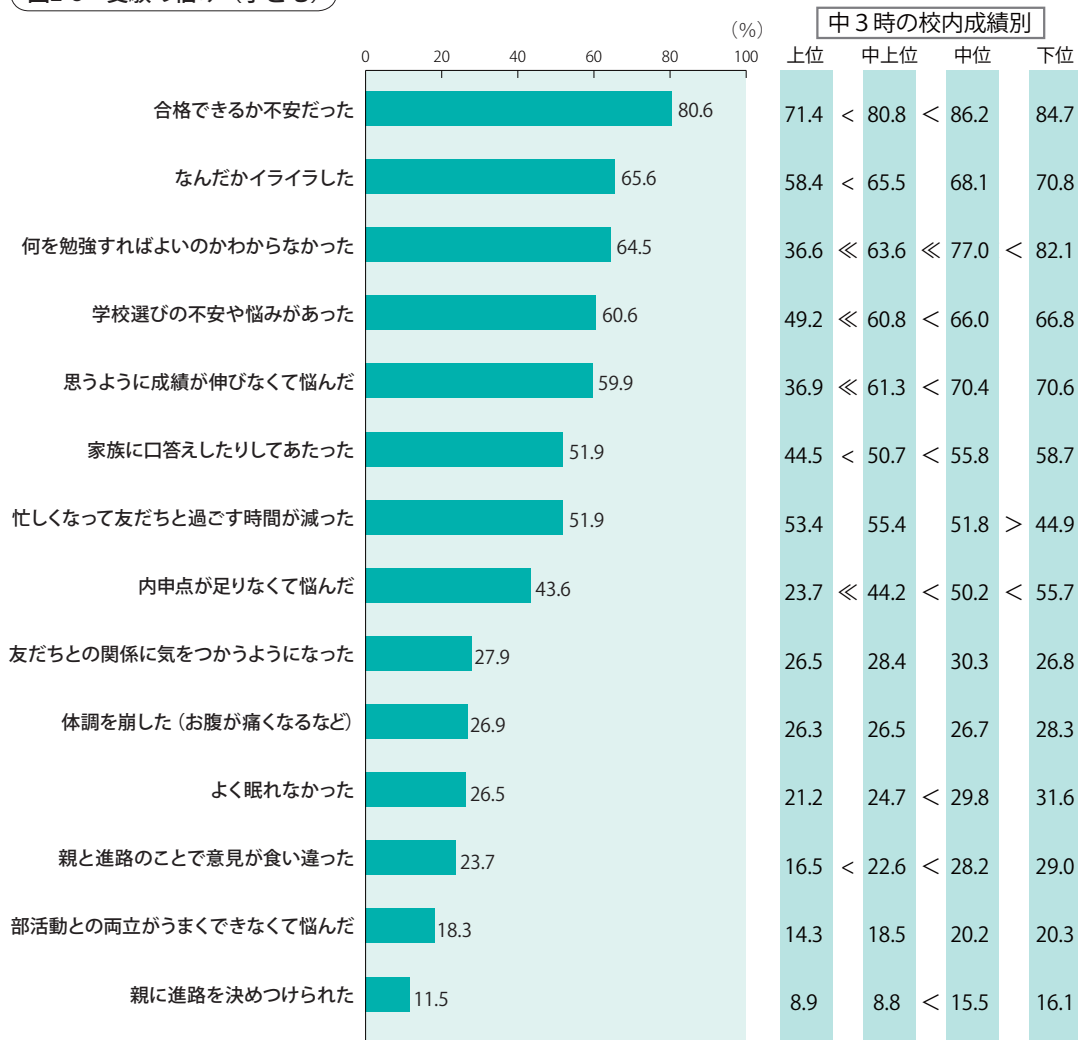
友だちとの切磋琢磨は大きかった。1点の違いで順位が大きく違うことで、細かいところまで気をつけるようになった。すべて、友だちがいたから今の自分がある。（福島県/公立/一般入試/男子）

5 受験の悩み（子ども）

8割の子どもが高校受験で合格できるか不安を感じ、6割の子どもは何を勉強すればよいのかわからなかったと感じていた。

Q 高校受験の悩みや不安に関して、次のようなことがどれくらいあてはまりますか。 **子ども**

図2-8 受験の悩み（子ども）



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があるもの、<<>は10ポイント以上差があるもの。

子どもの高校受験の悩みや不安をみると、合格への不安がもっとも多いが、64.5%が「何を勉強すればよいのかわからなかった」と回答している。高校受験期においても、勉強方法がわからずに悩む子どもの姿がうかがえる。また、中3時の校内成績別でみると、「思うよ

うに成績が伸びなくて悩んだ」など、勉強面での悩みは成績による差が大きい。それに比べると、「友だちとの関係に気がつかうようになった」などの友人関係の悩みでは、成績による差が小さい。

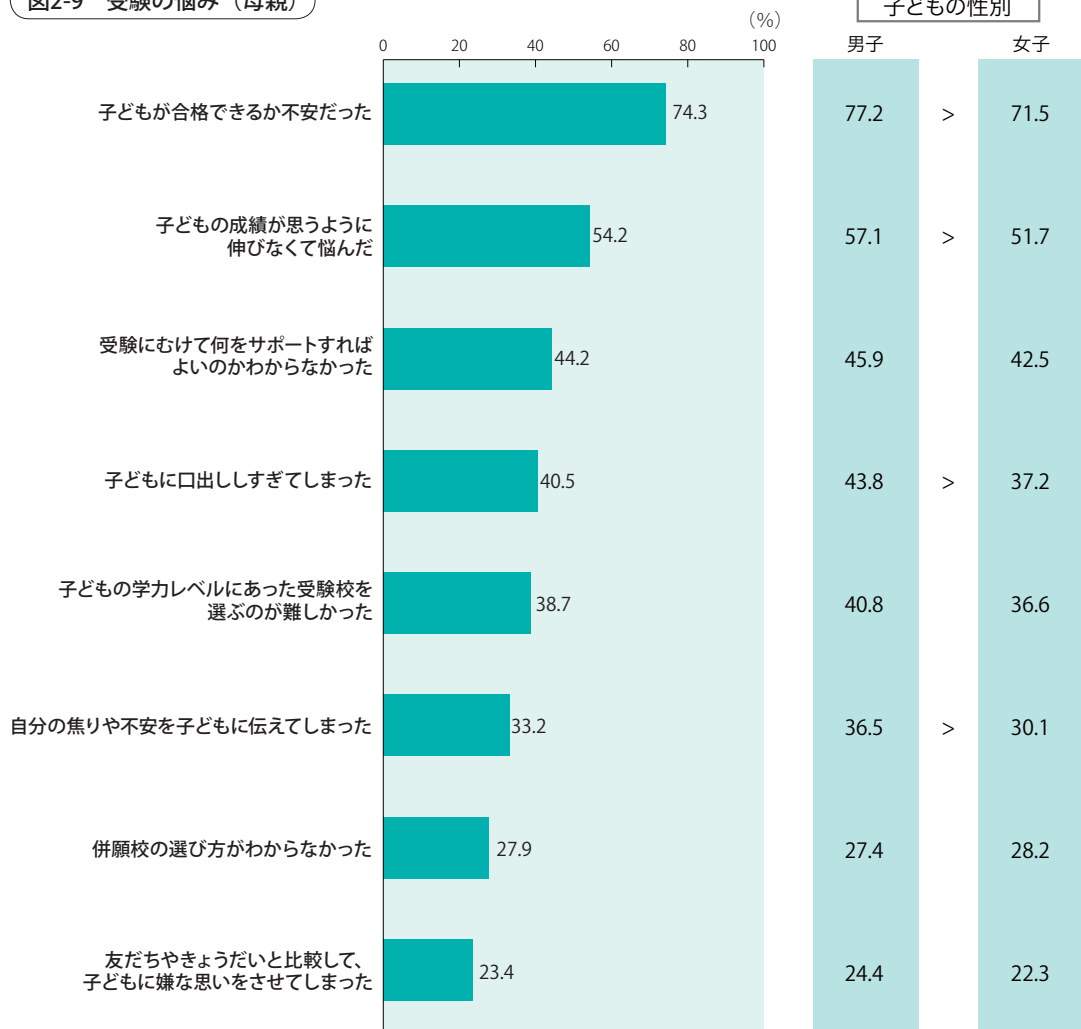
6 受験の悩み（母親）

7割の母親が子どもの合格への不安を感じ、4割の母親が受験にむけて何をサポートすればよいのかわからなかったと回答している。

Q あなたは、お子様の高校受験について、次のようなことで悩んだり不安を感じたりしたことはありましたか。

母親

図2-9 受験の悩み（母親）



注1) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があるもの。

子どもの高校受験に際して、74.3%の母親は子どもが合格できるか不安を感じており、54.2%が子どもの成績の伸び悩みを感じている。さらに、44.2%が「受験にむけて何をサポートすればよいのかわからなかった」と回答しており、受験期のサポートの難しさを物語ってい

る。また、子どもの性別で見ると、男子の母親のほうが「子どもの成績が思うように伸びなくて悩んだ」「子どもに口出ししすぎてしまった」などの比率が高い。

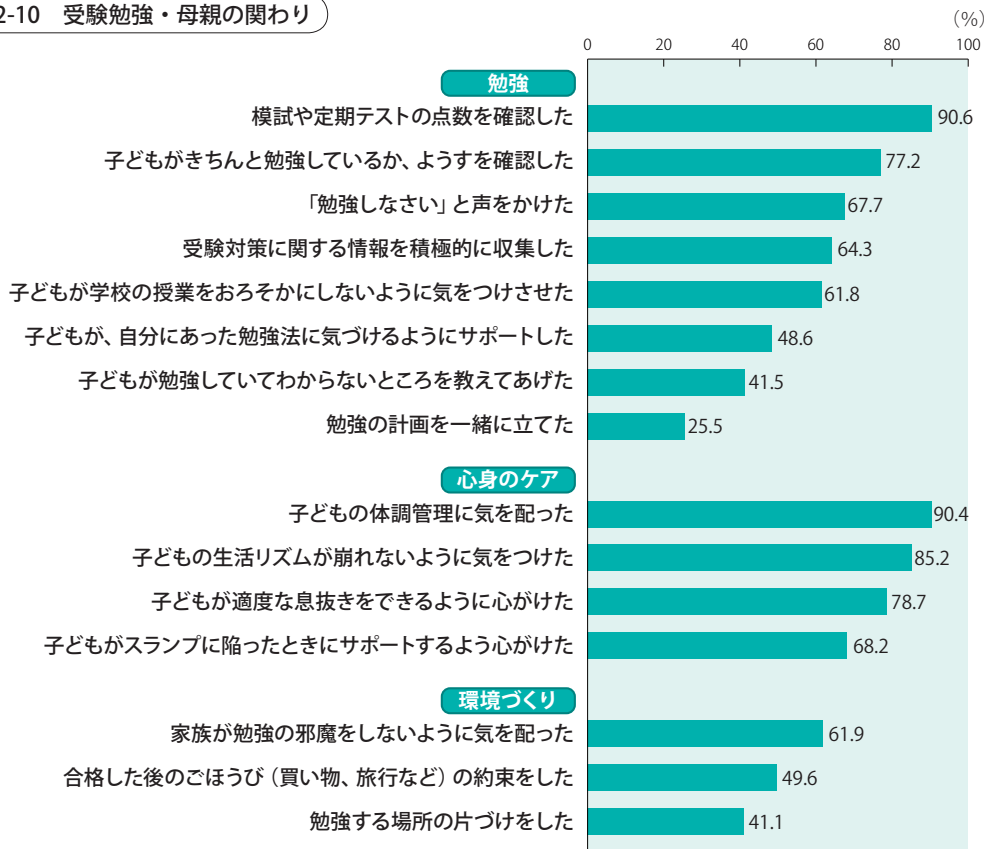
7 母親の関わり

9割の母親が「模試や定期テストの点数を確認した」「子どもの体調管理に気を配った」と回答。勉強を教えた母親は4割。

Q あなたは、お子様の受験勉強に関して、次のようなことをしていましたか。

母親

図2-10 受験勉強・母親の関わり



注) 「とてもそう」+「まあそう」の%。

少し口うるさくなってしまった。初めての受験で子どもに悲しい思いはさせたくないという一心でしたが、もう少しおおらかに見守ることも必要でした。(神奈川県/子どもは女子)

イライラしていたときのように対処すればわからなく、口出しせず自分で考えさせようと思いついたが、そのような対応でよかったのかいまだに思うところがある。(愛知県/子どもは男子)

上の子とのダブル受験だったので、私は、不安材料を持った上の子にかかりきりになってしまった。もっと考えてあげればよかった。(新潟県/子どもは女子)

模擬試験の結果が受けるたびに変わり、子ども以上に不安を口に出してしまった。点数に一喜一憂せず、見守ったり励ましたりするべきだった。(福井県/子どもは男子)

母親は「模試や定期テストの点数を確認した」など勉強面の関わり、「子どもの体調管理に気を配った」など心身のケア、「家族が勉強の邪魔をしないように気を配った」など勉強に集中できる環境づくりと、様々な関わりをしていたことがわかる。勉強面では子どものよう

すを確認したり声をかけたりするだけでなく、「子どもが勉強していてわからないところを教えた」(41.5%)、「勉強の計画を一緒に立てた」(25.5%)のように、具体的な勉強内容まで関わった母親もいる。

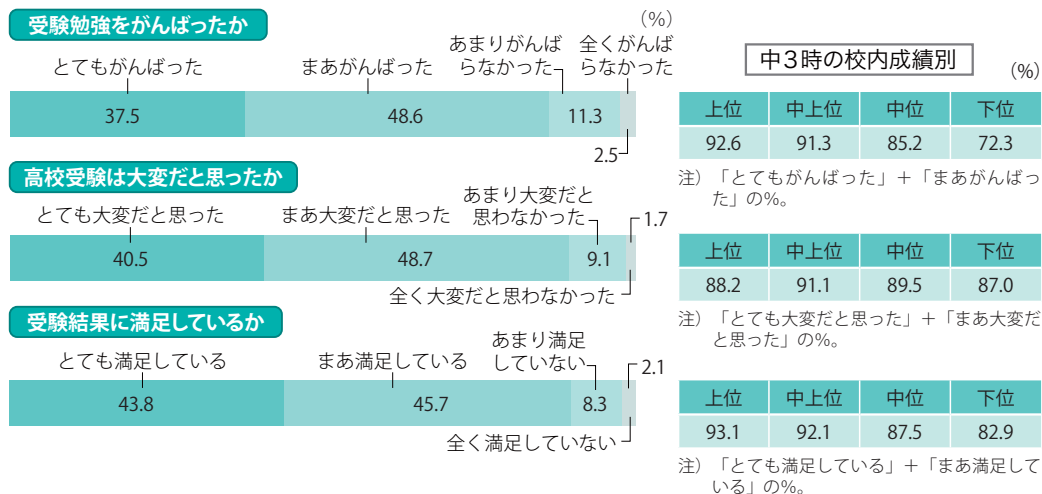
1 受験を振り返って

大半の子どもが、高校受験を「がんばった」「大変だった」「満足」と振り返っている。また、現在通っている高校に中学生のとき「ぜひ入学したかった」との回答は約半数。

Q ・あなたは、高校受験の勉強をがんばったと思いますか。
 ・高校受験は大変だと思いましたか。
 ・あなたは、自分の高校受験の結果に満足していますか。

子ども

図3-1 高校受験の努力・大変さ・満足度



Q 現在通っている高校は、あなたが中学生のときに入学を希望していた高校ですか。現在通っている高校は、受験した高校のなかでは第1志望でしたか。

子ども

図3-2 入学意欲の強さ

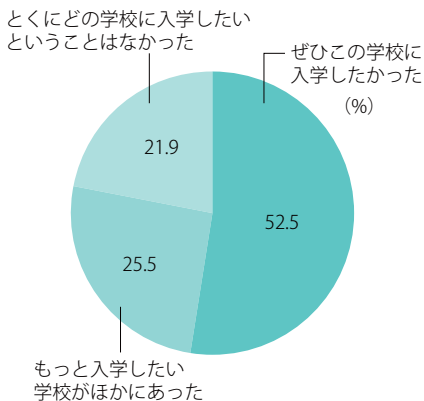
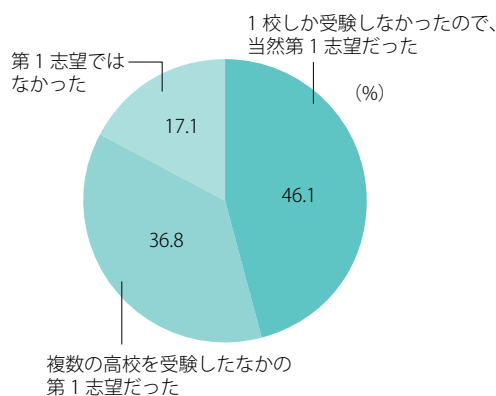


図3-3 第1志望か否か



約9割の子どもが、「高校受験の勉強をがんばった」「高校受験は大変だった」と回答すると同時に「高校受験の結果に満足している」と回答しており、全体として、高校受験の経験を前向きにとらえている。次に、現在通う高校についてみると、中学生のとき「ぜひ入

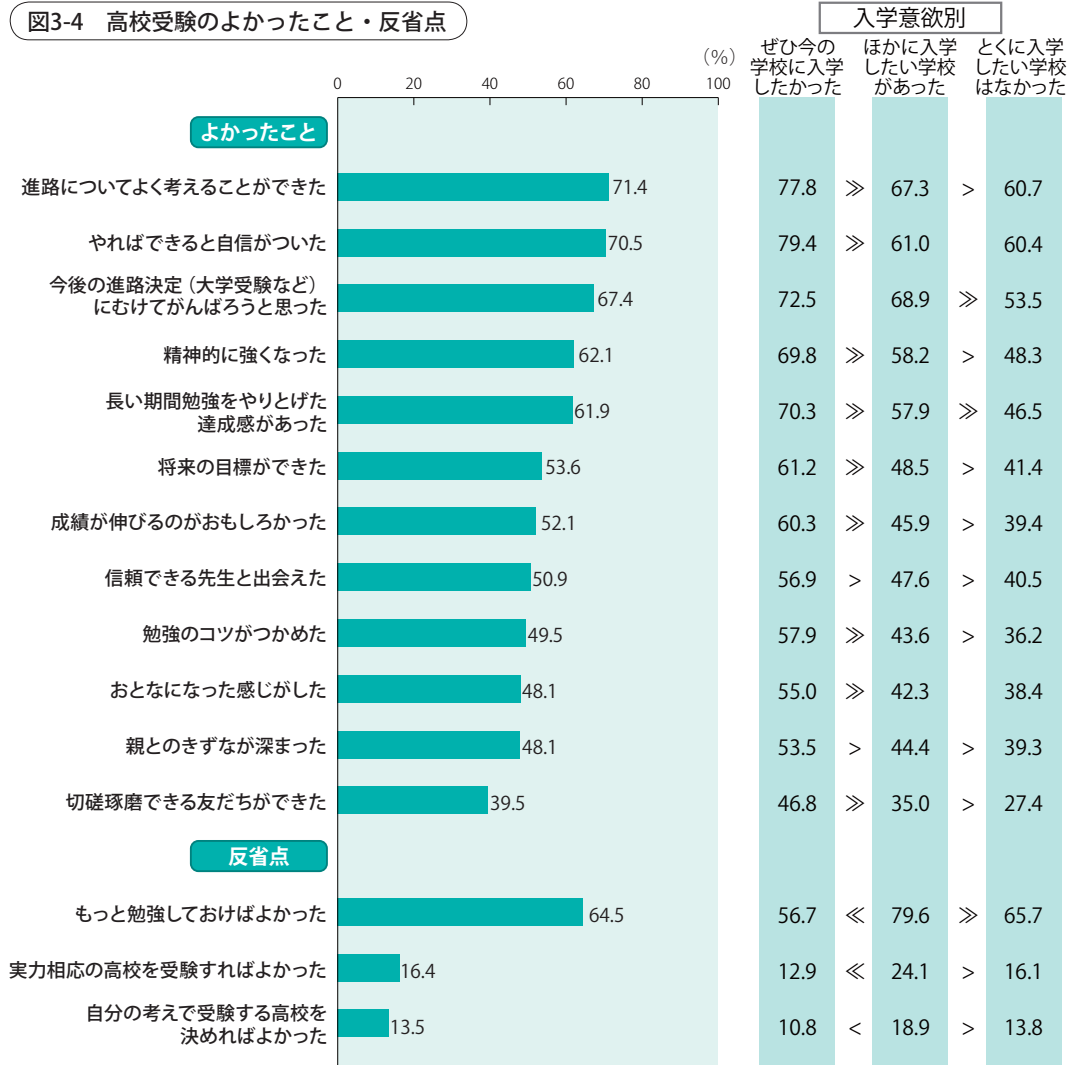
学したかった」という回答は52.5%である一方、「もっと入学したい学校がほかにあった」が25.5%、「とくにどの学校に入学したいということはなかった」も21.9%に及んだ。ただし、受験した高校のなかでは、約8割が現在通う高校が第1志望だったと回答している。

2 よかったこと・反省点

7割の子どもが、「進路についてよく考えることができた」「やればできると自信がついた」と成長実感を得ている。

Q 今、高校受験を振り返ってみて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。 **子ども**

図3-4 高校受験のよかったこと・反省点



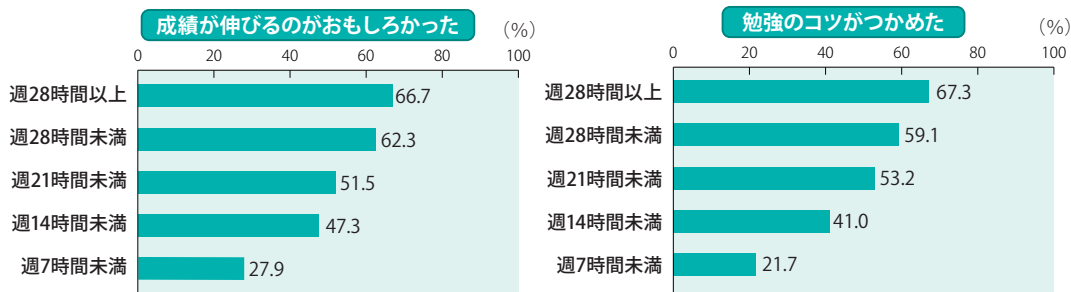
注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 注2) <>は5ポイント以上差があるもの、<<>>は10ポイント以上差があるもの。
 注3) 「入学意欲」の詳細はp15図3-2を参照。

高校受験を振り返って、6～7割の子どもが、進路をよく考えたり、今後の進路決定へのやる気が出たりするなど、進路に前向きな気持ちを感じている。さらに、自信がついたり、精神的に強くなったりと自分の力に対する成果も感じていることがわかる。その一方、もっ

と勉強しておけばという後悔も6割程度みられる。入学意欲別では、全体的に、今の学校に入学したかった子どもに前向きな回答が多かったが、今後の進路決定へのやる気については、ほかに入学したい学校があった場合との間にあまり大きな違いはみられない。

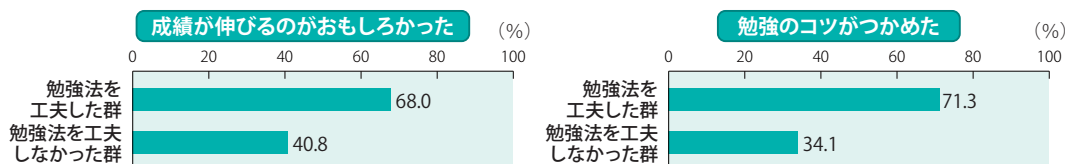
高校受験にむけての勉強時間が長い子ども、勉強法の工夫をした子どものほうが、「成績が伸びるのがおもしろかった」「勉強のコツがつかめた」と回答している。

図3-5 高校受験のよかったこと（中3 9月の週あたり勉強時間別）



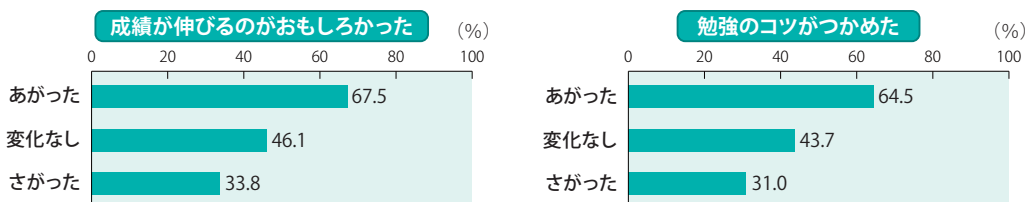
注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 注2) 勉強時間はp 8図2-1を参照。

図3-6 高校受験のよかったこと（勉強法工夫の有無別）



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 注2) 勉強法工夫の有無については、「勉強でわからないところがあったら、勉強のやり方をいろいろ変えてみた」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した人を「勉強法を工夫した群」、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した人を「勉強法を工夫しなかった群」とした。詳細はp 10図2-6を参照。

図3-7 高校受験のよかったこと（苦手教科の成績推移別）



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。
 注2) 苦手教科の成績推移はp 9図2-4を参照。

高校受験のよかったことのうち、「成績が伸びるのがおもしろかった」「勉強のコツがつかめた」の2項目に焦点をあて、受験勉強のしかたとの関連を探った。図3-5からは、中3時の勉強時間が長い子どもほど成長実感を得ている傾向が読み取れる。また、図3-6、

3-7からは、勉強法を工夫した経験、苦手教科を克服した経験をもつ子どものほうが、成長実感を得ていることがわかる。受験にむけては勉強時間を確保することに加え、そのなかで子どもたち自身が工夫をしながら勉強法を確立していくことが重要と考えられる。

Ⅳ 受験と高校生活

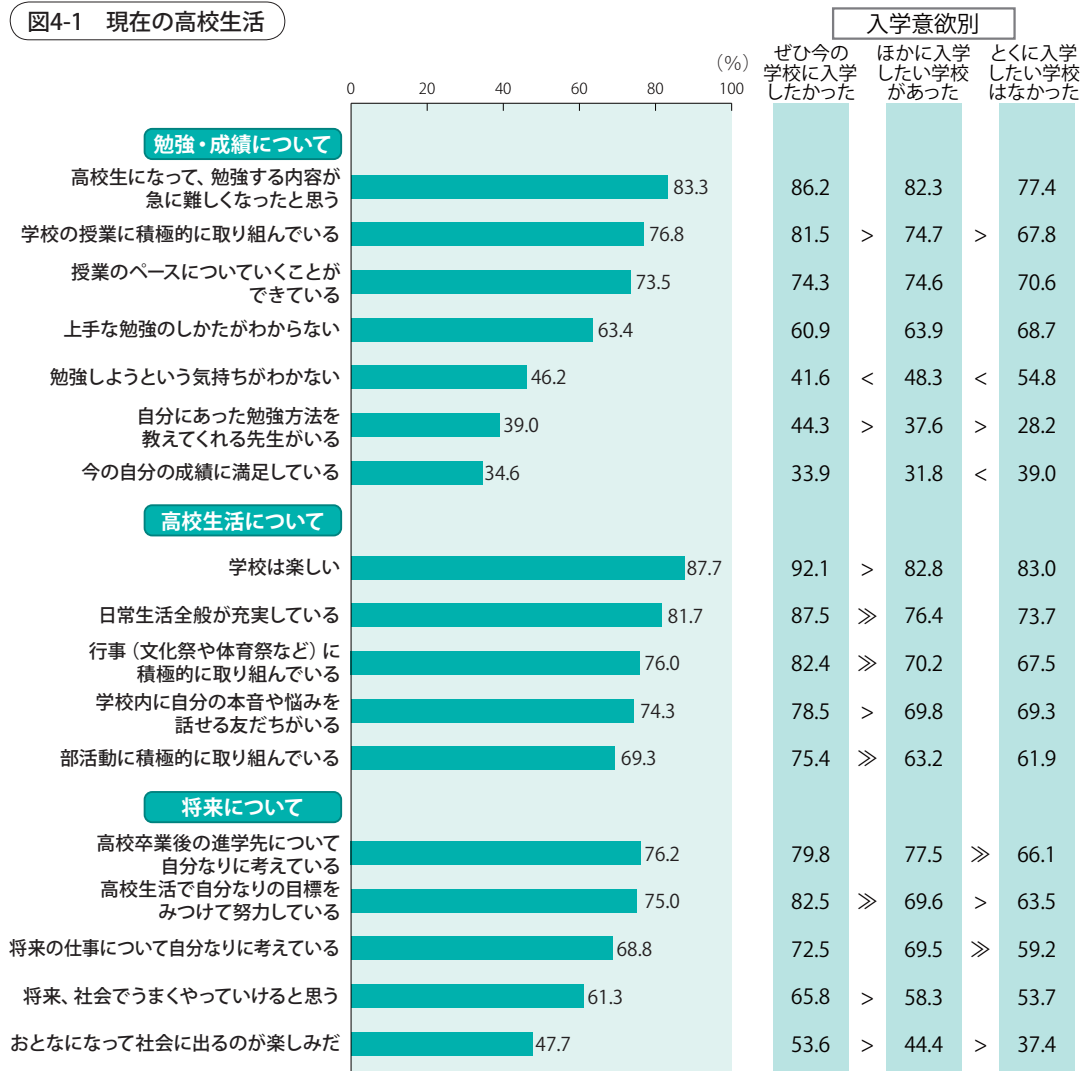
① 現在の高校での取り組み・悩み

8割以上が、高校は楽しく、日常生活が充実していると前向きな生活を送る一方、5～6割は勉強方法がわからず、意欲がわからないなど、勉強面での課題がみられる。

Q 現在、あなたには次のことがどれくらいあてはまりますか。

子ども

図4-1 現在の高校生活



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) <>は5ポイント以上差があるもの、<<>は10ポイント以上差があるもの。

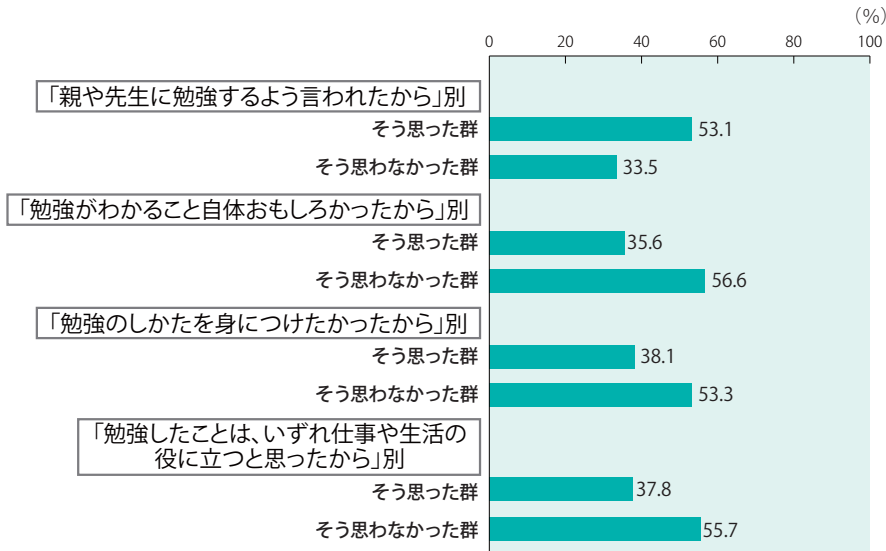
注3) 「入学意欲」の詳細はp15図3-2を参照。

8割以上が、高校の楽しさや日常生活の充実感を感じる一方で、勉強が難しくなったとも回答している。また、6割強が上手な勉強のしかたがわからず、5割弱が勉強しようという気持ちがわからないなど、勉強面での課題がみられる。入学意欲別では、今の学校に入學

したかった子どもは、全体的に前向きな意識をもっている。一方で、高校卒業後の進学先や将来の仕事について考えているかは、今の学校かほかの学校かを問わず、入学したい学校があった場合にはあまり差がなく、入学したい学校がなかった場合との間で差がみられた。

受験で「勉強のコツがつかめた」と感じた子どもでも、半数以上は現在「上手な勉強のしかたがわからない」と回答。

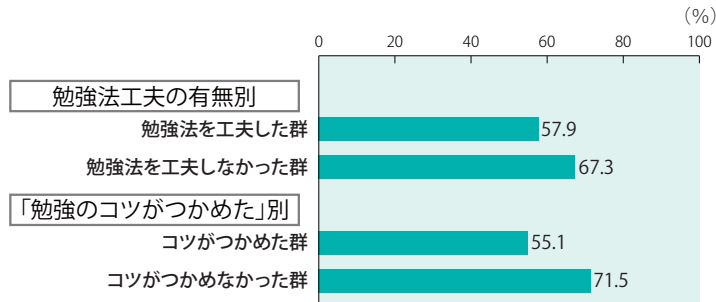
図4-2 現在「勉強しようという気持ちがわからない」の比率（中3時の勉強した理由別）



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 中3時の勉強した理由はp10図2-5を参照。「とてもそう」「まあそう」を「そう思った群」、「あまりそうでない」「全くそうでない」を「そう思わなかった群」とした。

図4-3 現在「上手な勉強のしかたがわからない」の比率（中3時の勉強法工夫の有無別、「勉強のコツがつかめた」別）



注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 勉強法工夫の有無については、「勉強でわからないところがあったら、勉強のやり方をいろいろ変えてみた」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した人を「勉強法を工夫した群」、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」と回答した人を「勉強法を工夫しなかった群」とした。詳細はp10図2-6を参照。「勉強のコツがつかめた」は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を「コツがつかめた群」、「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」を「コツがつかめなかった群」とした。詳細はp16図3-4参照。

現在の学習状況と、中3時の学習状況との関連をみる。図4-2からは、中3時に勉強のおもしろさや役立ち感を理由に勉強していた子どもは、現在も勉強の意欲が高いことが読み取れる。また、図4-3からは、受験で勉強のコツがつかめたと感じた子どものほうが、

現在勉強法で悩むケースが少ないことがわかる。ただし、少ないとはいえ、受験で勉強のコツがつかめたと感じた子どもでも半数以上が現在「上手な勉強のしかたがわからない」と回答している点は、課題であると考えられる。

親子二人三脚の高校受験

大妻女子大学 酒井 朗

今回の調査から浮かび上がったのは、高校受験をめぐる今日の親子関係である。

今回のアンケートは学校を通じての悉皆調査ではなく、インターネットによって実施されている。調査結果を読み解く上では、この点に留意しなければならない。母集団は調査会社のモニターであり、そこから該当者が抽出され、パソコン上で母親と子どもが答えるという方法である。このような方法が採用されたため、アンケート回答者は、親子関係がある程度良好な家庭が多いと予想される。

この点をふまえて今回の調査結果を見てみると、アンケートに回答した親子は二人三脚で高校受験に取り組んでいることが分かる。端的な例が、志望校選びの情報源に関する質問の回答である。子どもへの「あなたは、志望校を決めるのに、次の項目のようなことをそれぞれどのくらい参考にしましたか。」という問いに対して、もっとも多かった回答は「保護者の話」で84.8%に達した。

校外模試の結果も、担任の先生の話もそれには及ばず、「中学校が作成した進路指導資料（校内模試の成績も含む）」は59.6%にすぎなかった。業者テスト廃止前の高校受験とと言えば、生徒の成績や内申点が最重要で、それで進路先が振り分けられ、三者面談では担任教師が親子に対して受験可能な高校を紹介し、時には親子を説得するといった印象が強かった。だが、今や学校の担任教師の話や学校側が提示する情報はそれほど影響力や決定力を持たず、子どもにとっては親の話の方がより重要な情報源となっている。

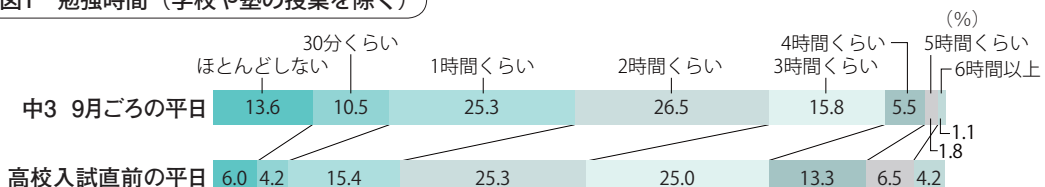
また、「あなたは、お子様の志望校を決めた時の

ことについて、次のようなことがどれくらいあてはまりますか」という問いに対して、母親の93.1%は「受験する高校を子どもと一緒に考えた」と答えている。子どもの側も、そうした母親の関わりに対して、それほど疎ましく思っているわけではなさそうだ。90.8%の子どもは「親はあなたの意志を尊重して志望校を決めさせてくれた」と答えている。「受験する高校のことで親と意見が食い違った」と答えた子どもは25.1%のみであり、「志望校を親に決めつけられた」と答えた子どもはさらに少なく、10.8%にしかすぎなかった。総じて、この調査に回答した親子は協同して受験に取り組むのであって、親子間の葛藤はそれほど大きくはない。

今回対象となった子どもは、勉強時間は比較的長いようである。中学3年生の9月で、半数くらいは2時間ないしそれ以上は学校や塾以外でも勉強している（図1）。ただし、勉強はほとんどしないという子どもも一定数おり、とりわけ成績の低い子どもには、直前になってほとんど勉強しないという者が15%近くいる（図表非掲載）。

親子二人三脚で取り組んでいるといっても、それほど必死に親子で高校受験に取り組んでいるようには見えない。「受験を振り返って」の質問項目で、子どもも母親ももっとも多かった答えは「まあがんばった」であり、子ども48.6%、母親46.6%である（母親は図表非掲載）。志望校を決める際に重視したのは、「自分の学力にあっている」で、94.9%の子どもが「重視した」と回答したが、「大学への進学実績がよい」というのは55.1%にすぎ

図1 勉強時間（学校や塾の授業を除く）



注) 「6時間以上」は「6時間くらい」「7時間くらい」「8時間くらい」「9時間くらい」「10時間くらい」「それ以上」の合計。

なかった。子どもの学力にあったところでもっともふさわしい高校を、親子が一緒になって選んでいる様子が目に浮かぶ。

なお、本当に問題なのは、実はここでは見えてこない親子である。様々な理由により、親子二人三脚で物事に取り組めない家庭がある。かつては

そうした家庭の子どもも、学校で指導されて受験に取り組めた。だが、高校受験において家庭が主体になってくると、親子で協同して受験に取り組めない家庭の子どもは、ますます不利な立場に置かれるだろう。この点にどう対応するかが、今後大きな課題として浮かび上がってくる。

臨床心理学の観点から

受験期は“友だち親子”が試されるとき —イライラの増幅を乗り越えて

目白大学/KIDSカウンセリング・システム 黒沢 幸子

今回の調査対象である高校受験期は、将来に向けてその進路の岐路に立たされる時期である。思春期の後半にさしかかり、思春期前半に生じた第二次性徴による身体の変化をほぼ通過し、より内面的な自己を模索する時期になっている。しかし、まだ現実性や社会性に乏しいため、子どもは一人前にやっているようでも不安を抱いており、親から見れば認識の甘さや頼りなさが目立つ時期でもある。

今回の調査から、この時期の親子関係の特徴と意義を探ってみたい。まず、保護者は、受験する高校について、学校や塾の先生に相談するなど、高校に関する情報を積極的に収集して、受験校を子どもと一緒に考えようとし、子どもも受験校選別に保護者の話をもっとも参考にしており、保護

者を情報源として頼っていることがうかがえる。志望校決定では、親は自分の意志の主張を抑えてでも、子どもの意志を尊重するように努めている。母親は、テストの点数を確認したり、体調管理に気を配ったりして、勉強面、身体面をよくケアするだけでなく、子どもの適度な息抜きや、子どものスランプへのサポートを心がけ、合格した後のごほうびの約束までもしている。ここからは、子どもの受験ストレスやモチベーションの維持にも細やかに気を配り、子どもの心理面のコントロールに大きく関与する母親の姿がうかがえる。

これらの傾向は、別の調査結果（Benesse 教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」2009年実施）から見出された、「友だち親子」という昨今の親子関係の特徴とも重なるようであ

表1 子どもの受験の悩み、よかったこと（母親の否定的関与別）

		全体	母親の否定的関与別 (%)			
			少ない	←	→	多い
子どもの悩み	なんだかイライラした	65.6	55.5	68.7	78.7	79.5
	家族に口答えしたりしてあつた	51.9	37.1	56.8	68.4	75.3
よかったこと	精神的に強くなった	62.1	64.1	62.1	61.4	56.0

注1) 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

注2) 母親の否定的関与については、「子どもに口出ししすぎてしまった」「自分の焦りや不安を子どもに伝えてしまった」「友だちやきょうだいと比較して、子どもに嫌な思いをさせてしまった」の3項目で「とてもそう」「まあそう」を選んだ個数によって、「少ない」～「多い」に分類した。

る。友だち親子では、親子は思春期になってもよく会話をし、親は子どもの嫌がるようなかわりはせず、肯定的で支持的なかかわりを多く行っている。しかし、一方で、親子の境界線が薄れ（ボーダレス化）、親子の“共揺れ現象”も生じやすくなり、子どもの自立や主体性を阻害する可能性も示唆されている。

高校受験も、子どものことではあるが、親は我がこととして動いてしまっている側面もあるかもしれない。その場合、子どもが思い通りにいかないと、親のほうがイライラし、口出しが増えるということにもなるであろう。

受験期を振り返って、子どもに口出しすぎた、自分の焦りや不安を子どもに伝えてしまった、友だちやきょうだいと比較して子どもに嫌な思いをさせてしまったと答えている母親は少なくない。このような悩みは、母親にとって特に息子に対してより多く感じるようである。思春期は“甘えと反抗”の両価性に揺れる時期であり、男の子は、女の子よりも思春期が遅延するとされている。母親にとって異性である男の子の受験期への対応は、より悩み多い傾向がうかがえる。

母親からの子どもへのこれらの否定的関与が多いほど、子どものイライラや家族への反抗的な態度が多くなっており、反対に、これらの否定的関与が少ない方が、受験期を経て自分が強くなったという子どもが多くなる傾向にある（表1参照）。図表は省略するが、親が「勉強しなさい」と言うよりも、息抜きやスランプのサポートを心がけるほうが、受験を経て子ども自身が強くなったと答える傾向が高い。また、受験期に「親や先生から勉強するよう言われたから」勉強したという子どもは、高校になって勉強する気持ちがわからない傾向が高くなっている。

不本意入学だった場合、その受験期は親子ともにストレスが確かに高いが、高校進学後に、将来をしっかりと見据えている姿は第一志望入学者と変わらないことがうかがえる。

以上のことから、高校受験の経験は、目先のことでなく、子どもの成長の長いスパンの一要因ととらえ、焦らず、親子ともに自立や主体性を獲得していくための貴重な機会とできるようにしていきたい。

教育心理学の観点から

学ぶ意欲・やる気の観点から見た受験勉強

筑波大学大学院准教授 外山 美樹

■ 自律的な理由による受験勉強と高校入学後の学習意欲ならびに学校適応の関連

心理学においては、自律的に行った行動は、適応的な結果と関連があることが示されている。受験勉強においても当然これがあてはまり、自律的な動機（理由）を持って受験勉強に取り組んだ生徒は、高校入学後の学習に対する意欲や学校生活における適応が高く、逆に、他律的な理由で受験勉強に取り組んだ生徒は、高校入学後の学習に対する無気力や学校不適応（ex. ドロップアウト）と関連すると言われている。

ここで19ページの結果を見ると、「親や先生に勉強するよう言われたから」といった他律的な理由で受験勉強をしていた生徒は、高校に入学してから「勉強しようという気持ちがわからない」と回答する者が多く（53.1%）、「勉強がわかること自体おもしろかったから」「勉強したことは、いずれ仕事や生活の役に立つと思ったから」といった自律的な理由で勉強していた生徒は、高校入学後における学習の意欲も高い。これは、受験勉強に対して、“（親や教師、社会によって）させられている”ととらえるのか、“（自ら望んで）している”ととら

えるのかによって、物事（学習や課外活動など）に対する積極性などが異なってくるためと考えられる。おもしろい（おそらく得意な）教科では“おもしろいから”という理由で受験勉強できるのは当然であるが、おもしろくない（おそらく不得意な）教科においては、“将来こうなりたから、自分の夢を実現したいから、将来に役立つから”といった自律性の高い理由で受験勉強することが、その後の学習意欲や適応につながるということになる。

■ 入学意欲と高校入学後の学校生活の関連

不本意入学者は学校適応が良くないと指摘されているが、今回のデータでもそのことが裏づけられた。18ページに示す通り、不本意入学者は本意入学者に比べて、「日常生活全般が充実している」「部活動に積極的に取り組んでいる」といった高校生活の適応に関する内容において、あてはまると回答した者の割合が少ない。さらに問題は、入学したい高校がなかった無動機入学者である。無動機入学者においては、高校卒業後の進学先や将来の仕事について考えるとといった将来展望の視点が他の者に比べて低い。

近年の進路指導においては、卒業後（つまり、高校入学後）新しく迎える生活においてよりよく適応し、進歩向上していくことができるように、指導・援助することが重要であることが指摘されている。よって、進路指導の際には、“将来こうし

た職業につきたい”“将来こういう人間になりたい”など、生徒自身が自己実現の目標をもてるような配慮が重要になってくる。それが先にも述べた自律的な理由による受験勉強にもつながることになる。希望する高校に合格することは重要なことではあるが、第1希望ではない高校に入学することになったとしても、それが将来への目標を達成できる進学先であれば、高校入学後の学習意欲や学校適応はそれほど悪くはならないであろう。

■ 受験勉強における意欲・やる気を高める工夫

受験勉強は長期間に渡って行われるものであるため（4ページ参照）、意欲・やる気を持続させることが受験勉強を乗り切るために重要になってくる。そのやり方や工夫は、11ページで紹介されている。中3時の成績が上位の生徒ほど、受験勉強をするうえで自分なりの工夫やうまく乗り切るコツがあると回答しており（成績上位では49.3%、下位では16.9%）、そうした工夫やコツがいかに重要であるかがわかるだろう。学習を効果的に進めていくために、意欲・やる気を高めたり維持したりする方法は、心理学の知見からも明らかにされているので、それらを表2にまとめてみた。受験勉強における意欲・やる気を高める工夫やコツは、人によっても異なることが考えられるため、表2に示された方法の中から自分に合ったやり方を見つけることが大切である。

表2 意欲・やる気を高めるための方略（伊藤・神藤，2003をもとに作成）

方略のカテゴリ	方略の内容
内容方略	学習内容を身近なこと、よく知っていることや興味のあることと関係づける。
整理方略	ノートのまとめ方、部屋や机などの環境を整える。
負担軽減方略	得意なところや簡単なところをしたり、飽きたら別のことをしたり、休憩をしたりするなど、負担の軽減を図る。
めりはり方略	学習時間の区切りをうまくつけて集中力を高める。
想像方略	将来のこと（ex. 高校生活のこと）を考えたり、積極的な思考をしたりする。
社会的方略	友だちとともに学習をしたり相談をしたりする。
報酬方略	飲食や親からのごほうび、すなわち、外的な報酬によって学習へのやる気を高める。

注) “方略”というのは、“方法”や“戦略”といった意味である。

引用文献

伊藤崇達・神藤貴昭（2003）. 中学生用自己動機づけ方略尺度の作成 心理学研究、74、209-217.

調査企画・分析メンバー

●協力者

酒井 朗 大妻女子大学教授
黒沢 幸子 目白大学教授／KIDSカウンセリング・システム
外山 美樹 筑波大学大学院准教授

●企画・分析担当

樋口 健 Benesse教育研究開発センター研究員
朝永 昌孝 Benesse教育研究開発センター研究員
宮本 幸子 Benesse教育研究開発センター研究員

※所属・役職名は刊行時のものです。

Benesse® 教育研究開発センターのWEBサイトのご案内

Benesse® 教育研究開発センターで実施している各種調査の結果は、すべて以下のWEBサイトでご覧いただけます。

<http://benesse.jp/berd/>

こちらのサイトは で検索できます。

「高校受験調査」

発行日：2012年1月20日 発行人：新井健一 編集人：原 茂

発行所：(株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター

1PROMO